



一詩集春くさは毎月一回を發行し  
一年十二冊を以て其巻を終る

一詩集春くさは諸家の新體詩を蒐  
む

一詩集春くさは時に他の材料を以  
て編輯の休裁を異にするところある

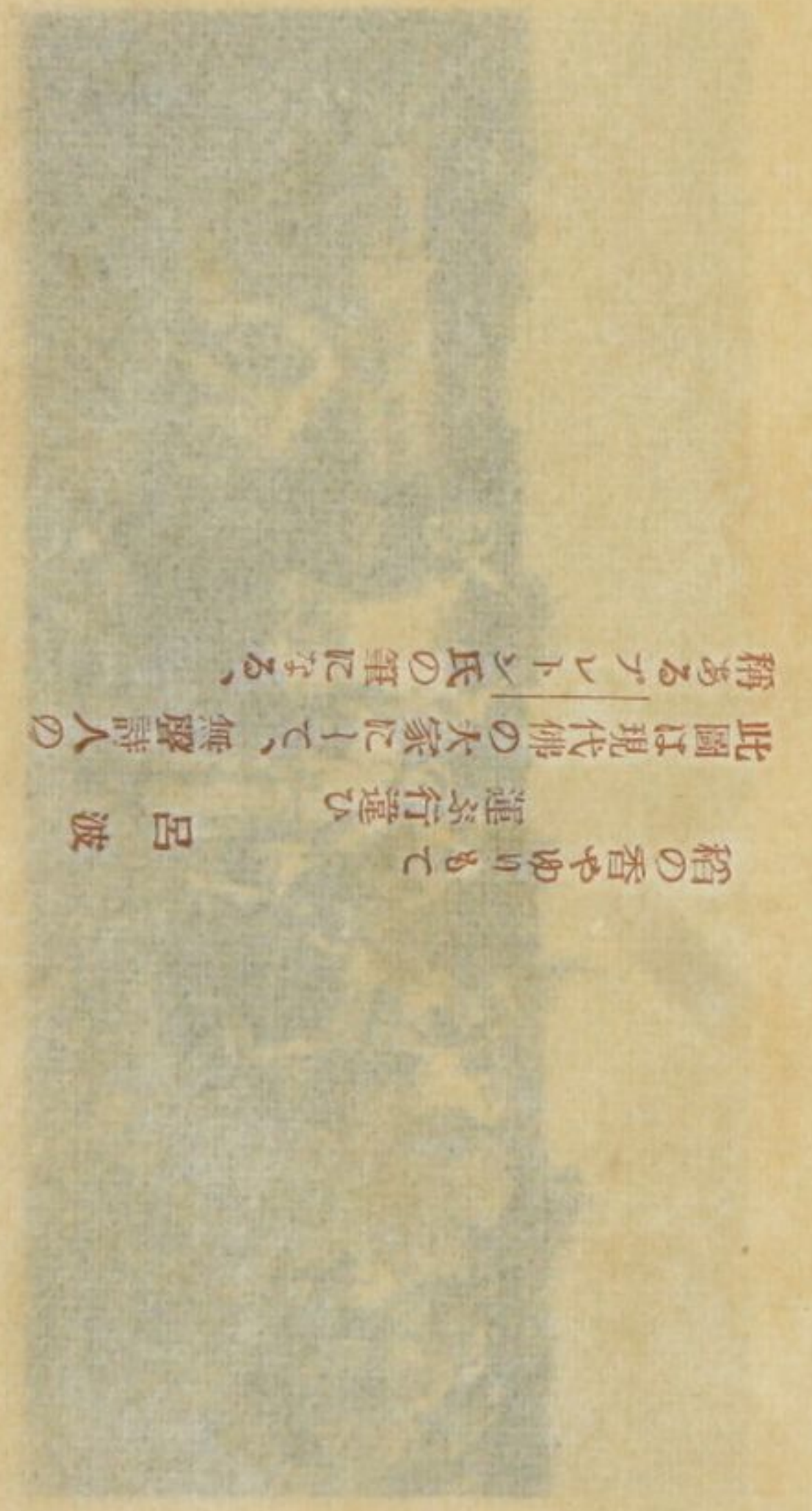
ベ



第一の巻第壹集目次

遊 夏戀り罪 山少 雨か 花二 失馬  
 東の のた 茶 のた 羽 せ 場  
 日白 のた 夕ぐ のる 辰  
 記 雲矢け 花妹 暮さ 瓶鳩 針 猪

水 薄 桑 三 山 河 高  
 落 田 田 木 本 井 安  
 露 泣 春 天 露 醉 月  
 石 葦 風 遊 葉 茗 郊



此圖は現代佛の大家にして、無量詩人の  
 稱あるアハトシ氏の筆に在る、  
 稻の香やゆりゑて  
 蓮花行違ひ  
 呂波





遊 覧 記 録 山 多 郡 大 井 村  
 東 の 山 崎 村 大 井 村  
 日 出 山 崎 村 大 井 村  
 記 録 大 井 村 大 井 村

得 志 者 大 井 村 大 井 村  
 大 井 村 大 井 村 大 井 村

大 井 村 大 井 村 大 井 村  
 大 井 村 大 井 村 大 井 村  
 大 井 村 大 井 村 大 井 村  
 大 井 村 大 井 村 大 井 村



馬場底猪

高安月郊

獨立閣は暮れにけり  
檄の面に影落ちて  
あはれ自由の鐘も裂け  
フイラデルフキヤの秋の雨  
ふるさと風やたけるらん  
雲も續かぬ千よるづの  
山の姿も異にして



彼の演説  
に腹蛇論  
幻夢論あり

太平洋の浪遠し

筆をつるぎと揮ひしが  
蛇の力の強くして  
口に炎を吹きしかど  
夢となり行く悔やしきよ  
博浪の椎打たねども  
逐はれ逐はるゝ身となれば  
國にほどこすすべもなし  
國の外にてはからなん

古き國よと新しき  
人に示すや緋をどしの  
鎧着て立つ若武者は  
紫の幕かゝげたり

羅馬は鷲に埋れけり  
返り咲き散るリエンデイ  
武士の道こそ我にあれ  
今や自由と叫ぶなり  
自由叫て建ちにける



國は我戸もあけにけり  
自由を叫ぶ聲聞て  
立つはあらぬかラフソエツト

船を借るにはあらねども  
同トなさけの寄るならば  
鐘は裂けても文飛て  
自由の旗ぞひらめかん

封建の棟落ちしかど  
代る柱のまた重く  
國はひとやとならんとす  
ひとやの扉破らばや

ひとやの扉破るとも  
代る柱のまた腐れ  
金に位に勢に  
餓鬼の踊と變らずや

自由の心誰か知る  
心の自由誰か知る  
政のみ自由かは



心の自由を自由なる

心のひとや打てや打て  
こがねの錠切れや切れ  
古き習と諸共に  
古き思想も裂けや裂け

自由は人のいのちかな  
自由あらずは人伸びト

自由は國の光かな  
自由あらずは國暗し

自由は進歩の車かな  
自由あらずは世は老いん

自由は開化の泉かな  
自由あらずは地は枯れん

自由は眞のしるべかな  
自由あらずは理も見えト

自由は善の基かな





自由あらずは道立たト  
自由は美さへ導かん  
自由あらずは技成らト  
自由は理想の母ぞかし  
自由あらずは理想無し  
東の洋は昔より  
自由の端も知らさりし  
天より落つる風當てよ  
自由の皮を起さばや



茲は早くも進み行く  
心ばかりは後れねど  
心ばかりぞ走り行く  
我身いつまで違ふらん  
友はいくたり倒れけん  
我ぞ一人となりけるか  
我も血汐となるやらん  
涙惜まぬ人や無き  
骨はいづくに埋るらん





石もしるしもよしやよし  
朝日耀く富士の根を  
自由の塔と廻らばや

失せたる針

河井醉茗

なかの妹小袖縫ふと  
黄昏いそしむ解衣の  
衾おくみ下襦、膝に乱れ  
なれたる針を失へり  
夕はせまる疊の上を  
婢女はひよそゝる探る間に  
覺束あつなげの光りて



|   |                      |                     |   |                      |   |   |   |   |                      |                      |                     |   |
|---|----------------------|---------------------|---|----------------------|---|---|---|---|----------------------|----------------------|---------------------|---|
| 失 | 衣 <small>きぬ</small>  | 何 <small>なに</small> | 寐 | 傷                    | 針 | 美 | 皿 | 刺 | 姉                    | 高                    | す                   | 小 |
| せ | 新 <small>あたら</small> | 疑                   | よ | み                    | 吸 | し | に | さ | は                    | く                    | ゑ                   | さ |
| た | し                    | ひ                   | げ | に                    | ふ | き | 落 | れ | 静                    | 灯 <small>あかり</small> | の                   | き |
| る | く                    | の                   | に | 湧                    | 胸 | 輪 | た | し | か                    | を                    | 妹                   | 針 |
| 姉 | 針                    | 草                   | 見 | く                    | に | を | る | 壁 | 胸                    | に                    | 闇                   | は |
| に | は                    | は                   | ゆ | か                    | 句 | 作 | 繪 | に | を                    | 人                    | に                   | 隠 |
| 返 | ぬ                    | 茂                   | る | 清                    | あ | る | 具 | 向 | を                    | を                    | 怖 <small>おそ</small> | れ |
| ら | へ                    | ら                   | 子 | き                    | り | ぶ | の | ひ | 退 <small>しりぞ</small> | た                    | ぢ                   | た |
| す | ど                    | む                   | よ | 潮 <small>うしほ</small> | て | と | 滴 | ぬ | け                    | ど                    | て                   | り |



二羽の鳩

山本露葉

茨の花の道芝にこぼる、頃なりき、平塚の松  
林を逍遙して、ゆくりなくもの、音におとろか  
されしことあり、たとハ玉を轉まろハすに似たり、  
こゝ鳩よと胸のうちにくりかへすまもなう、す  
でにふた、び若芽をふける桑の木かげに、とび  
ぬぐる二羽の雛鳩を認めぬ、白き翼、ふくよかな  
る胸、平和の姿、いひしち幽微の感、おさへがた  
きものあり、この歌をつくる。(六月廿九日平塚にて)

桑の木がくれ今日もまた  
二羽の小鳩よ、とびめぐる  
光の化現ひかりか地のうへに  
かくもま白き姿見る  
榮さかの領りやうか零落れいらくの  
足ゆるすべき地ならトよ  
されば光の宮使はしめ  
その鳩をしてまもらしむ  
愛にみちたる胸なれば





さこそは征矢もたゞざらめ  
 翼をあけて地のうへに  
 天の福音を説きてあれ

いばらの冠いたゞきて  
 にへとなるをもいとほトよ  
 朽ち易き世に永劫と  
 靈の力をとかしめよ

嗚呼地にとんで美はしき  
 鳥よ、天よ、あり放ちた



祭りの壇に、あつまりに  
白き姿は、かゝやくよ

榮<sup>は</sup>の領土を踏みく<sup>て</sup>  
天<sup>あめ</sup>の樂譜を印<sup>しる</sup>したれ  
さつ矢とる子の歌ふべき  
そのしむたげの曲にあらず

瞳<sup>ひま</sup>か黒く生れぬて  
優なるなりによそほなよ  
眞晝の靈か休<sup>やす</sup>息<sup>いひ</sup>は





桑のほづ枝のうへにあれ

おほわだつみの深きより

くしき眞珠は生れたれ

桑の木立の浅きにも

かゝるくしびの鳩を見る

自然の眞趣に合へばそ

情ある手に抱かるれ

人生のふる宮の朽しより

鳩の如くに舞はしめよ

桑の木がくれけふもまた

二羽の小鳩よとびめぐる

光の化現か地のうへに

かくもま白き姿見る



花

瓶

わだつみの眞珠の如く  
大空の星の如くに  
いとふかく君がみむねに  
あたゝかく秘めし花瓶

さればにや運命の神の  
瞳の矢、おかさゝりけん  
神の手にかくるゝ小鳩  
野路にしてやすき眠りや

時として百合の白きも  
紅ゐのうばらの匂ひ  
此の花にしかぬ榮さかや  
葉かげにもかをれる姿

白壁のつよき光りに  
はかなきはしるしゝすさび  
照らさるゝ榮ははあれども  
さゝやすすき曉の星

あゝさなり夢の園生に



まぼろしの虹の七いろ  
吾がおもひあまりにたかく  
君が瓶のふかきにしかず

花瓶の水は盡きせず  
溢れては流れもぞすれ  
さればまた、吾や翡翠  
つかれたる翼ひたさむ

或時は吾れの胸にも  
この瓶の白き抱きぬ

胸の火の燃ゆるまされ  
今はたゞ残れるしづく

かげうつるその黄昏や  
彼の小さき牧の羊の  
合歡にして足なゆむ如く  
あゝ君の泉につかむ

かつ鳴りて清き泉よ  
その底にうぶくは花か  
神わざの奇しき示現





花  
瓶  
を  
秘<sup>ひ</sup>  
め  
た  
る  
君  
よ



かたみぐさ

三木天遊

君が指輪に鑄られたる、  
見まほしさよ、戀の名の！  
寶石、龍のならび捲く、  
たくらぶる誰が紅涙と？

硯にそへる手鞠あり、  
五色の糸の麗はしや！  
筆にならぶ花簪



もつれし髪かみの残のこらずや？

壁かべにかゝれり、繪ゑ姿すがたは、

獨ひとりを須し臈りゅうも在あらせトか？

牀こゝろ邊へに立たてり、つま琴こゝろは、

昨きのう宵よ、松まつ風かぜか、村むら雨あめか？

漏もらしたまふよ、朝あさ顔がほの

蔓つるも愁うれに結むすばうるを？

見みすや、さばかり聴きき目めも、

紫むらさのひとつ挿さめるを？

つらき晝ひるはよけしかど、

花はなは見るまに萎し垂たりぬ。

浮うき世よの風かぜはよけしかど、

花はなと見るまにみまかりぬ。





雨の夕暮

ゆ く 水は絶わす、悠々！  
 聲は無し、夕ぐれの雨。  
 ゆ く 雲は絶わす、飄々！  
 風も無しまぼろしの峯。

雨をめぐる鐘のね咽せて、  
 かは霧や、五村の森。  
 おゝ！ほのかに渡し呼ぶらし、  
 ひよどりの消ゆく方に。



みまもれど、雲をはらんで、  
白帆あり、空しくゆかず。  
雨しきり、鳥なきかへり、  
渡守いまだ答へず。  
心なく流るゝ水に、  
飛鳥川なげくもあだか。  
おのづから雲動くなり、  
人の世の雨のゆふぐれ。



少

妹

桑田春風

人ひとや誰たぞ、

小こ猫ねこたはぶる

菊きくのかけ、

穿は底そこ履りの音ねの

やさしげな。

あきつ逐おうて、

飛と石いしづたひ

蝶と々々々々 鬚ひげ

箒は木きもつ手ても、

いぢらしや、

あきつ逐おへば

小こ猫ねこはむつる

振ふりの袖そで

まるびて落おつる

毬まり一つ

「みいちやんや、



毬つきましよと

よりそへば、

「あ  
ら  
姉様」と、  
繪のやうな。

山茶花

山 茶 花 の  
咲ける小窓に、

紅 と き て  
は、笑む君よ。

か し づ け る  
雛人形の殿に、

添 寝 して、



今いまか寤さめけむ。

なつかしの

夢ゆめをたどりて、

爪つま紅べにの

こゝろげはひか。

消きゑのこる

雪ゆきの腕うでに。

くれないの

袖そで口くち捲まきて。

小こ春はる日ひの

日はあたくかに、

窓まどに凭より

ほゝ笑わらむ君きみよ。

見みよやかの

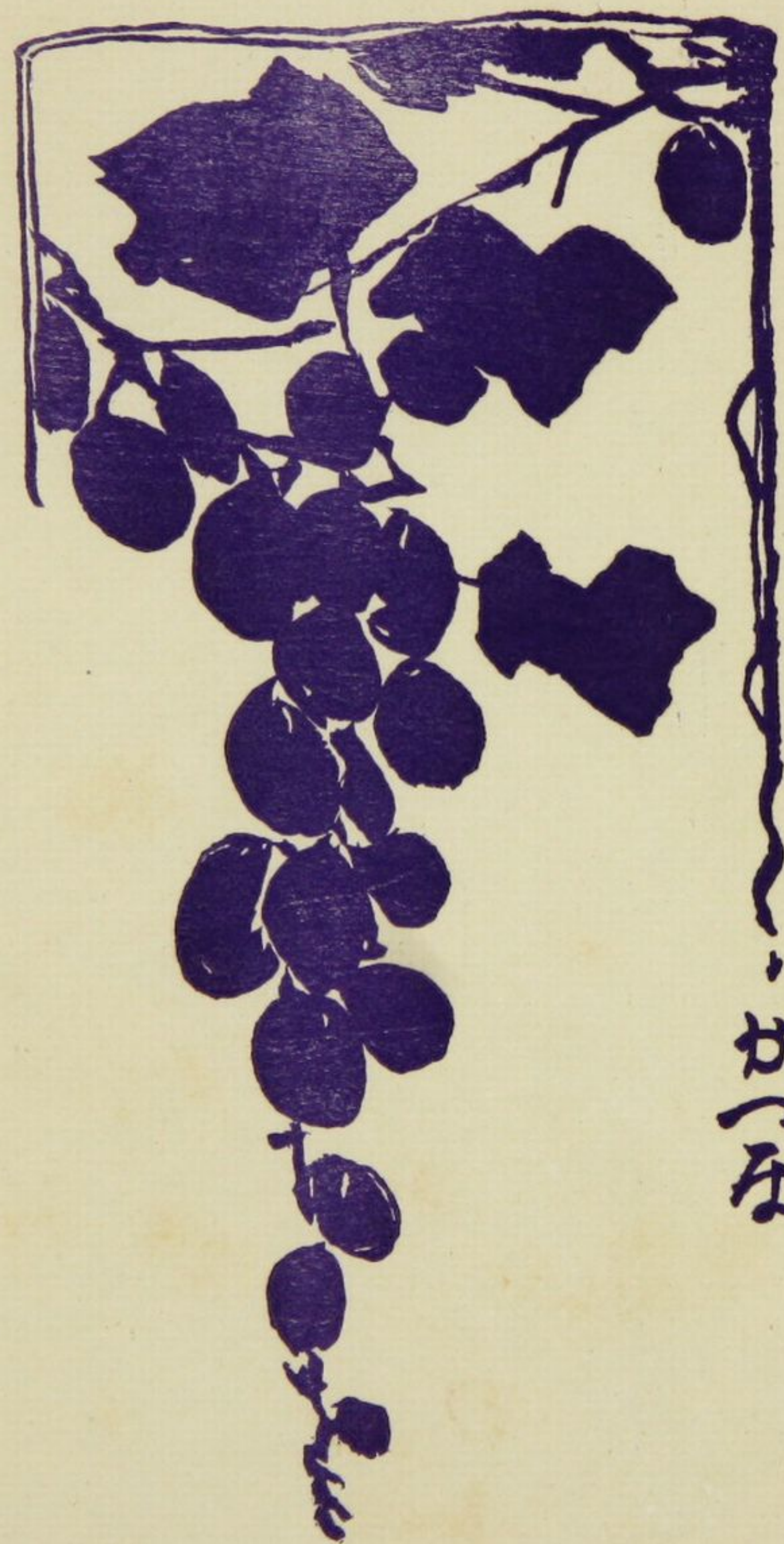
人ひとにかくれて、

みそさしい、

ひそかに來き鳴なく。

山さ茶ちや花はなの





かつな

微ほ笑わらみ  
 紅べにとく君きみよ。

みそさしい  
 しば鳴なく聲こゑに、

柴しば垣がき  
 咲さきてこぼるよ。  
 ぬけつくゞりつ、



罪

薄田泣菫

「夕ぐれ集會あり、堂に上れ、先生きたる」と示あれど、身ひとり樹陰に隠れ入りて懸想の痛みを忍び泣きぬ。

素より成道興にあらす、願瘡せても祈るべきを、若きぞ罪なる人を見ては



無着の心を得るに堪へず。

聞け、今讚美歌堂におこる、  
世の路よけたる報ありて、  
友みな行功幸を見んに、  
信なき身のみは罪に入るか。

罪をも厭はず、人もあらば  
凭りても泣かんを、人も去りぬ。

う た げ

春の夜うたげの蓆ながく、  
酔ひしや、主人は眉をあげて  
語るは掛想のむかし談、  
盃ふくみて聞くもあるよ。

賓客の子、入興ありて  
吾にも許せと口を細め、  
顔よき少女子近う呼びて、



半らは盡きたる瓶子とれり。

福田われらの願ならず、  
腕の白きに凭らば足んぬ。  
味よき車を縁と見よと、  
家の子みづから足るに似たり

あれ見よ少女は恥に酔ひて、  
うけたる盃膝になげぬ。

戀の夫

祈年祭のさむき夕  
羽ある神の子狙ひ得しや、  
戀の矢心臓に傷を穿ち、  
疼みにこらへで吾ぞ病める。

弱胸わづらふ誰によりて  
小さき平和の手にもすがる。  
かなしき調を口に誦して、



みづから慰むつらきものぞ。

懸想と詩歌を酒に組み  
て若きが酔ふべき三の小壺  
趣味ある友とは誰かいふや。

苺は熟して市に入れど、  
吟身いまなほ愁帯びて、  
わが詩は宴會の興にのらず。

夏の白晝

野苺の葉がくれ光よけて、  
蜥蜴も眠れる夏の眞晝  
静かに南の窓にもたれ、  
黒髪ながきを思ひ慕ふ。

をりから牧童笛を吹きて、  
無心の調子も情に入りに、  
遂には得堪へず庭におりて、





木<sup>こ</sup>間<sup>ま</sup>の小路<sup>こうじ</sup>に隠<sup>かく</sup>れ入<sup>い</sup>りぬ。

あゝ野<sup>の</sup>の小<sup>こ</sup>羊<sup>ひつじ</sup>水<sup>みづ</sup>を飲<sup>の</sup>むと、  
ぬるめる流<sup>なが</sup>れに走<sup>はし</sup>る頃<sup>ころ</sup>を、  
似<sup>に</sup>たりなわが身<sup>み</sup>も心<sup>こころ</sup>饑<sup>う</sup>ゑて  
運<sup>うん</sup>命<sup>めい</sup>孤<sup>こ</sup>なるに啜<sup>すす</sup>り泣<sup>な</sup>くよ。

年<sup>とし</sup>齡<sup>い</sup>の若<sup>わか</sup>きどまこと幸<sup>さい</sup>無<sup>なし</sup>  
晝<sup>ひる</sup>、夜<sup>よる</sup>感<sup>かん</sup>トて愁<sup>うれひ</sup>たぬす。



遊東日記

水落露石

○六 日

東台墨陀の花今か盛なり、ことゝ  
の春を奈何で見過し給ふべきな  
と筆まめなる吾妻の友にそゝの  
かされて、四月六日といふに草庵  
を立ちいづ

漁車濱名湖を過ぎけるほど

汐干して漁夫のむれゐる船のかけ

御殿場のほとりにて

甲斐か根や菜の花乏しこのあたり



興 津

うす霞むそなた松原三保か崎

〇七 日

上野松源樓上柏木探古翁遺愛品

入札會に臨む

唐櫃や螺鈿の櫻ものふりぬ

東台に花を賞しての歸るさ、

鶯横町に碧桐梧氏に會す

思はずの君なりけるよ櫻人

〇八 日

結縁や灌佛の日を淺草寺

甘茶賣る媼も念佛や佛生會

旅ながら灌ぎまゐらす甘茶哉

金色や甘茶に光る御佛

灌佛や小さき枚のかちあひぬ

夢香洲

花盛竹屋の渡舟二度わたる

〇九 日

花曇ひと日歌舞伎にくらしけり



○十日

雨中上野音樂會に臨む

花吹雪姫君の馬車續きけり  
樂堂に柏手の聲や春の雨

○十一日

虚子庵に遊ぶ

まあちやんをからかひあふも日永哉

根岸庵を訪ふ

句のはなし書畫のはなしやくれ遅き

藏六氏が古瓦に模したる今戸

燒の茶托頗る風致あり

北堂のすゝめ給へる新茶哉

○十二日

小金井看櫻

玉川を隔てゝ續く櫻人  
大木の櫻のもとやすみれ草

○十三日

日光所看

湯炎や日光羊羹唐からし



春日さす陽明門のまぶしさよ  
浮彫の牡丹や蝶や春の宮

○十四日

中禪寺に向ふ

乗りなれぬ駕の笑も春の旅  
折りくるゝヤシウの花や九十九曲折

華巖瀧

巖つばや乙女鳥に似て一寸赤し

湖畔

櫻咲くは六月とこそ中禪寺

歸京の途次

駕にのり瀛車にのりさても永き日や

○十五日

翌日は立つ京も名残やくれの春

○十六日

箱根福住樓

湯上りや麥酒に添ひし草いちご  
また出逢ふ浪花の人や春の宿  
賣に来る箱根細工や春夕



春の夜や湯槽の人の京言葉

塔の澤

激湍に山吹ちるや雨の隙

○十七日

江の島

窟出て春日まばゆき海の面  
壺焼や不二を彼方に春の海

鎌倉懷古

蓬生や畑うつなる屋敷跡

鶴が岡

湯炎に静が舞を忍ぶ艸  
折からの競馬ゆかしや古社

承久の往時偲べは

春やむかし風に銀杏の散ることよ

○十八日

歸庵

暫時見ぬ庭珍しや射干の花



明治三十四年十月一日印刷  
明治三十四年十月五日發行

金 十 五 錢

不 許  
複 製

編者 金尾種次郎  
大阪市東區南本町四丁目卅六番屋敷

印刷者 江間傳三郎  
大阪市東區錦屋町二丁目七番屋敷

印刷所 大阪國文社  
大阪市東區本町二丁目三十番邸

發行所 大阪市東區南本町心齋橋筋角  
金尾文淵堂書店



來出版四第

# 無花果

麗美本製繪口刷色版パイタロコ

一條成美君畫

中村春雨君作

己るも子小にの庭荷た葉が懸の葵  
 に文共弟説依如と套る、け日歴  
 四壇にもにりき社をは幸多て的沈  
 版を熟讀むてに主のし雨露應説以せ  
 を覺讀むべ同和人繼て氏伴慕集大わ  
 重ねせ置くに霧のよ無大住を阪が  
 たらんと、交家々温り宗花家什し毎  
 にする若兄庭たると取、杏撰は新間  
 於ては此むけ天びあり此に評天か  
 知れ發傑べる地希ら信作依者下變  
 後が教好なり其悲人來一博に五所  
 十何家るゆ心劇情の陳に、る聞あ  
 に寂宗物、復耳衝鶴當尾所のら  
 一實教な光活原突な撰崎も賞ん  
 てた家り明と珠家るし紅るをど

錢六稅郵 錢五拾四金

著君芳幽池菊

# んやちつよ

本美珍寸の前室

爲山君意匠表裝

金文字及上下金箔引

よつちやんは今年五つの子の女で著者菊池幽  
 芳君の令嬢ですが少の虚飾もなく眞率なる  
 過かき同情の筆を以てその平生を詩的に書れ  
 たものでよほ趣味の多い冊子です兒童研究  
 に志ある人には善き参考となり世の母たり妻  
 たるものには如何ほと興味深く感せしむるで  
 せうか恐らく一段この本を繕いたものはよつ  
 ちやんの面影を長く忘れることば出来ませす  
 いそれこの冊子の體裁の可憐に美しくい事  
 はた十分に出版界を驚かすに足るべきものと  
 固く信ずる處です

コロタイプ版五葉挿入再版出来

錢四稅郵 錢五拾四金



春くゆ

集歌詩体新君董泣田薄

これは薄田泣董氏の長短五十篇の新体詩を  
集めたる書に候挿畫には満谷國四郎君の彩  
筆になるコロタイプ版數葉ありペエジの色  
刷輪廓は工學家松尾素濤君の新意匠に成り  
候て見ては眼に美しくしく誦みては心に清き  
慰籍と理想を與ふべしと信ト候書肆は斯様  
の書を諸君に勸むるに遠慮を要せずと存ト  
候實價四拾錢郵税四錢に候

暮笛集

集歌詩体新君董泣田薄

暮笛集の三版は体裁を更め工夫を凝らした  
る新意匠を以て現はれ候卷中の詩も作者少  
なからず朱を加へ候ゆゑ自然面白を新たに  
したるもの有之候はんと存ト候世の事物の  
日を経れば陳くなり行くが中に詩歌のみは  
常に新らしく美しくしく候幸福なるは詩集を  
携ふる人と存ト候至、書肆は諸君に暮笛集  
を勸め候 實價卅五錢郵税四錢に候







著雜學文君客歌々浩田角

出門一笑

郵金 參拾錢

「老僕とわれ」野花「風頭語」等小品文數十を集め一篇無韻詩といふべきものなり。旅行あり、讀吟名勝の如きは好尚詩趣に當る所を見るべし。案内記なり。向上「旅行」句「花」の如きは人生觀のある所を見るべし。蓋し著者の詩想は理趣に該むを以て長と。抽象に過るを以て短とするべし。人生と自然に洗りて一味の詩致感興深きは今日の文壇に在りてききたるべし。獨得たるを失はずといふべし。春末に真有爲の大平論あり。南海の哲家の一語を紹介したるものなほ著者が理を好む所を見るべし。大阪朝日新聞批評。

詩國小觀

郵金 四拾錢

「長明、魯望、瀟明、屈原、賈誼、蘇武、字宙は長へに字宙の外に遷るを得ず」と夫れ然り人間は遂に人寰を脱する能はずといふかコレわが浩々歌客子が仰いて天地萬有の象を觀し附して人生有情の理を會得せらるるべし。感思なるに達し意ふに人間として富士の山麓に生れたる子は幸福なりき可憐なる「詩國小觀」の一部之をとりて讀み來れを時に崇極奇趣自ら湧くものあるを覺ゆめり。大阪毎日新聞批評。

歐米漫遊記

川上音二郎 金四十錢  
川上貞奴 郵稅四錢

漫旅行案内

旅行家の好伴侶 金三十錢  
製本美麗 郵稅四錢

五度摺極彩色 附錄  
繪葉書十二葉  
▲松島 ▲宮島 ▲裏見瀧 ▲橋立 ▲墨堤 ▲奈良  
▲大磯 ▲有馬 ▲江の島 ▲住吉 ▲長良川 ▲金閣寺

讀書案内

讀書家の好伴侶 郵稅共金參錢  
第壹號既刊 一年分金卅六錢

掲載要目  
○口縮 ○論說 ○史傳 ○叢話 ○雜錄  
○文苑 ○彙報 ○新刊紹介



坪内逍遙君閱 梅澤和軒君著

### 菅公論

製本既成 金 參拾錢  
郵税 四錢

本書は菅公論の博覧り所論的確老更獄を断するが如く其井上高山大町諸氏の所説を批判し縦横所説を批判せる眞に文壇の逸品なり今や菅公の一千年は來らむとす右流左死の眞相を窺はむと欲せば須く一本を座右に備へ給ふべし

新案金蘭簿

### 芝蘭集

コロタイア扉 金 貳拾錢  
色クロス綴 郵税 貳錢

信仰、希望、長短、最幸、最非、天然、季節、人物、人品、景色、書籍、花木、動物、器具、題銘の各欄にわかれて友の面影を二百以上の詩句で写しむる新案の金蘭簿也

月刊俳諧雜誌

### 車百合合

第二卷第二號 金 七錢  
九月末日已刊 郵税 共

掲載要目 筆蹟○俳諧○評論○評釋○文章○雜吟○募集句○地方通信○其他

近刊豫告

中村春雨君作  
丹羽默仙君畫

### 小説雛鳩

製本美裝





近日美装出版

七日間

極彩色木版口繪釘裝美麗

菊地幽芳君作

こゝに最も美にして最も大膽なる  
最も狡猾にして最も機敏なる絶世  
の一佳人あり六尺有餘の男子一掀  
一翻せられつゝ相共に生死の境を  
彷徨す讀むもの心膽を寒うせずん  
ば止まず讀者を激せしめその最後  
まで讀了せずんば安んずる能はず  
らしむるもの蓋し本篇の如きは無  
からん

坂田耕雪君畫

金三拾五錢 郵税六錢



